

植物の嫌気応答に関する国際会議 (ISPA) に参加して

小柳敦史

東北農業研究センター

今年の夏にはオーストラリアの東海岸で作物学関係の大きな国際学会が行われたが、同じ頃に西海岸のパース市にある西オーストラリア大学で標記の講演会が開催された。この学会は、過湿、湛水および冠水条件における植物の反応を主題としており、根に関係する研究内容が多く報告された。

参加者は約 70 名で、この分野で著名な Armstrong, Greenway, Jackson, Sachs, Setter, VanToai, Voeselek の各氏の姿がみられ、日本からは石澤公明 (東北大)、中園幹生 (東京大)、島村聡 (作物研) の各氏を含む計 7 名が参加した。法学部の半円形の階段教室で講演が行われ、別教室でポスターセッションが行われた。講演は一人 30 分、ポスター発表では全員が数分間のプレゼンテーションを行うなど、ゆったりとしたスケジュールとなっていた。

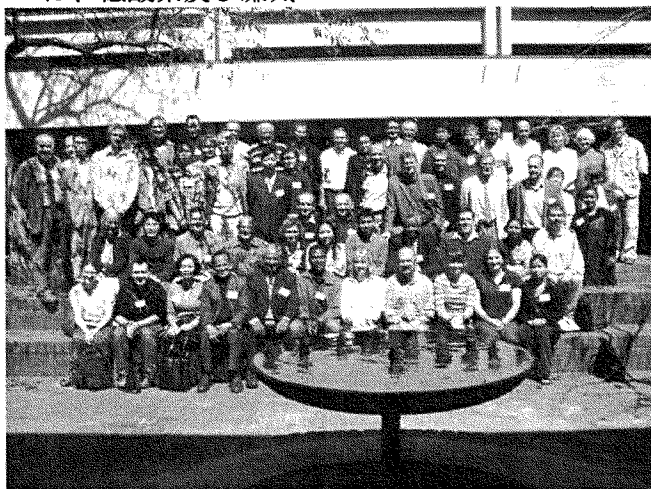
口頭発表のセッションは以下の通りで、括弧内に発表題数を示した。嫌気条件下における pH 制御(3)、嫌氣的なエネルギー代謝(5)、明/暗サイクルと冠水した植物(3)、内部通気とそれが根圏に及ぼす影響(7)、低酸素及び嫌気条件に対する遺伝子発現と順化(9)、湛水下の植物ホルモン・根-地上部シグナル・導管輸送(6)、湛水及び冠水に対する作物の改良(6)にキーノートアドレスを含む 40 題であった。

ポスターセッションは、低酸素及び嫌気

条件における分子・生化学反応(7)、塩×湛水条件における植物(6)、湛水土壤における作物/牧草：成長の阻害及び遺伝的改良の可能性(12)の計 25 題であった。

全体に理学分野の発表が多かったが、その中では「ヘモグロビンや植物ホルモンに関係する遺伝子を導入して嫌気応答への影響を調べた研究」や「湛水時に地上部から根端へ効率的に酸素を運ぶには、根の放射方向の酸素漏出を少なくさせることが必要であることを示した研究」などが目をひいた。農学分野の発表は少なかったが、実用的な耐湿性品種を作出したという報告はなく、この分野の研究の難しさを痛感した。

この国際学会は、今から 25 年ほど前に始まったもので、3 年に 1 回の割合で講演会が開かれている。記録によると 1990 年の横浜の国際植物科学会議の折りにもセッションのひとつとして開催されたということである。第 9 回となる次回は 2007 年に石澤公明氏を中心に仙台で開催されることが決まり、準備が始まりつつある。多湿な日本の研究を海外の研究者に知ってもらいたい機会になると思われるので、本会の会員も奮って御参加願いたい。なお、当該講演会のホームページは <http://utenti.lycos.it/sifv/ispa/> で見ることができる



2004 年 12 月 9 日受付

*連絡先 〒960-2156 福島市荒井字原宿南 50 東北農業研究センター

E-mail: oyanagi@affrc.go.jp